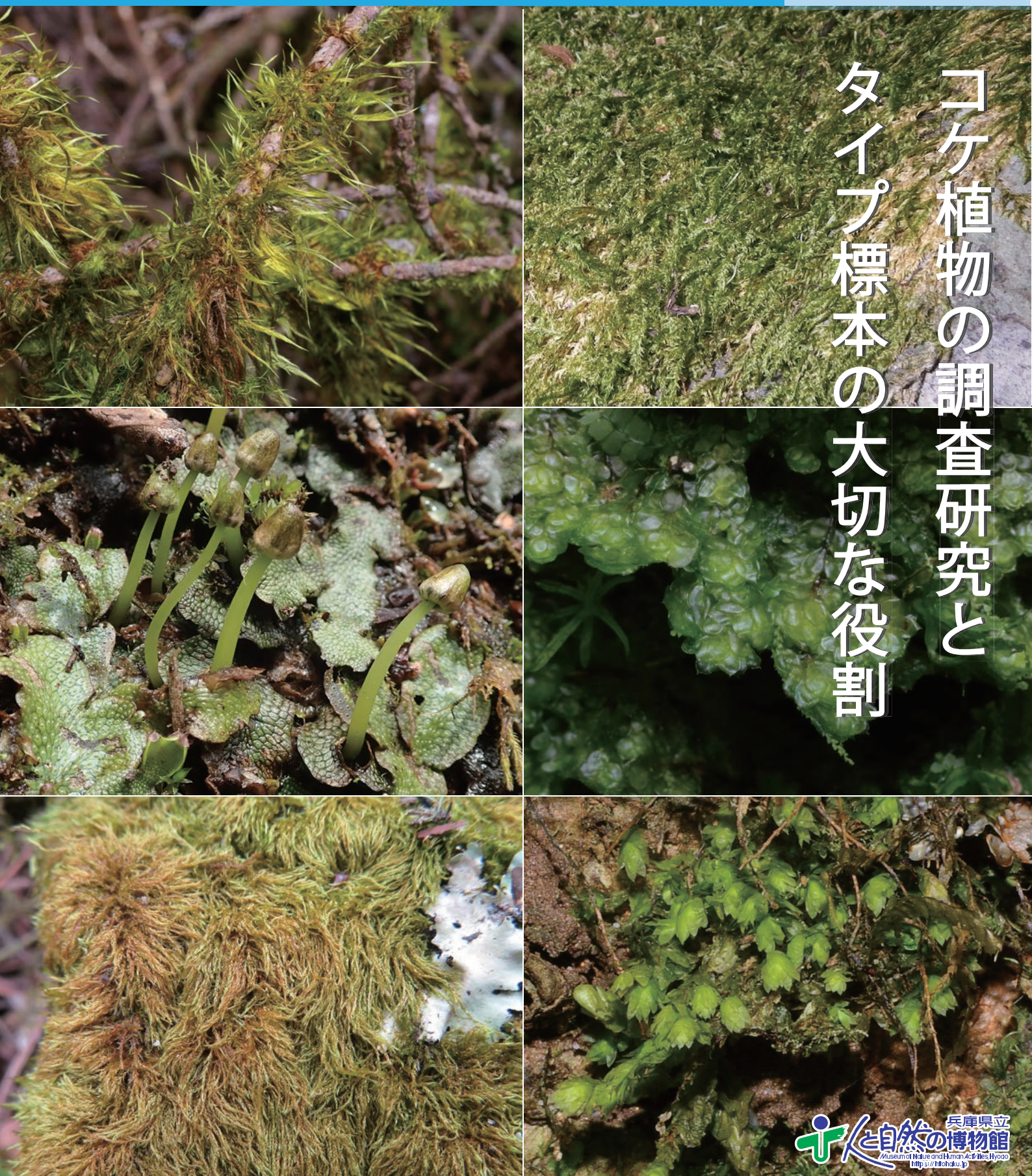
ひとはく通信

ハーモニー

116

Mar. 2022



コケ植物の調査研究とタイプ標本の大切な役割

兵庫県立 人と自然の博物館
Museum of Nature and Human Activities, Hyogo
http://hitohaku.jp

コラム

収蔵資料の活かし方

森林土壌標本を展示やセミナーで活用

森林土壌の標本は他の標本と同様に、その形態や性質によって、いくつかに分けられ、それぞれ調査・研究はもちろん、展示（常設、企画）、あるいはセミナーなどにも利活用されています。

例えば、ひとはくの常設展示では、開館以来の展示で「六甲のアカマツ林」というコーナーがあります。そこには褐色森林土（アカマツ林とスダジイ林）の土壌はぎとり標本（モノリスともいう）が展示されています。これは、それぞれの樹林の中で、幅約0.8m×深さ約1m×奥行約1mの穴を掘って山頂側に土壌断面を作り、その土壌断面をはぎとってきたものです（写真1）。その土壌の断面調査を行うと同時に、別に土壌試料（標本）を採集し、その一部を使って土壌の理化学的性質の分析を行います。

2020年度に開催された展示特別企画「ひょうごの草原」では、草原特有の黒ボク土と、古い時代にできた赤色土などとの比較のために、褐色森林土の土壌標本を一緒に展示しました（写真2）。それぞれの土壌標本を並べて展示することで、土粒子の大きさや色、含まれている石の状態などを比べることができます。またセミナーでは、土壌標本を触って粒径を調べる訓練に使用します（写真3）。実物標本を使うことで、より説得力が増すと考えられます。

小舘 誓治（コミュニケーション・デザイン研究グループ）

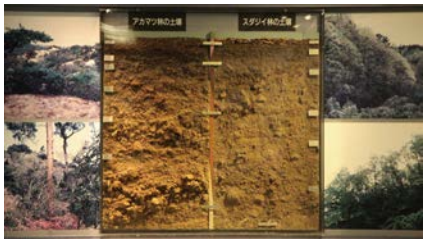


写真1　森林土壌のはぎとり標本を使用した展示例

写真2　土壌標本を展示企画で使用した例

写真3　土壌標本をセミナーで使用した例

トピックス

ひとはく活用術

新収蔵庫棟

ひとはく開館30周年にあたる2022年に、新収蔵庫棟「コレクショナリウム」がオープンする予定です（図1）。開館以来、国内外のプロ・アマ研究者らから寄贈され、蓄積されてきた60万点以上の植物標本が、新収蔵庫棟に移管され、保管されていくことになります。「そんなに集めてどうするの？」、標本に携わる研究者らがよく聞かれる素朴な質問です。標本は、過去に戻ることのできない私たちにとって、過去から現在までを知るための貴重な資料です。また、適切に保存された標本からはDNAも活用でき、絶滅危惧種の保全や地域の自然再生など、未来への手がかりも与えてくれます。しかし、一般的には、標本が持つ価値が浸透していないのも事実です。コレクショナリウムは、植物の収蔵庫だけでなく、標本の持つ価値を全ての人へ開くため、工夫を凝らした常設展示も整備します。博物館の標本がもたらす価値を、様々な視点から紹介していきます。一番の目玉は、普段は見ることのできない収蔵庫環境を再現したコレクションギャラリーです。紫外線カット加工を施した全面ガラス張りの部屋には、恒温・恒湿の環境を完備し、鳥類・哺乳類の本剥製、植物や昆虫の標本が並びます（図2）。博物館のある町フラワータウンのシンボルとなるべく、「開かれた博物館」を目指していきますので、ぜひ、完成を楽しみにしていただけたらと思います。

山﨑 健史（系統分類研究グループ）

図1　新収蔵庫棟 イメージ図

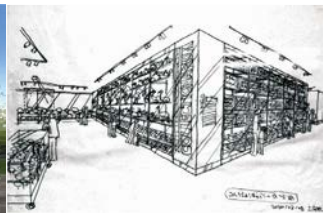


図2　コレクションギャラリーのイメージ

ひとはく通信　ハーモニー No. 116
編集・発行　兵庫県立人と自然の博物館　〒669-1546　兵庫県三田市弥生が丘6丁目
TEL：079-559-2001（代表）　FAX：079-559-2007
発行日　2022年3月1日
印　刷　プリテック印刷株式会社
03 教 Ⓟ 2-007A4